日常の観察者

テンプレっていいよね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常の観察者

【Nコード】

N0528X

【作者名】

テンプレっていいよね

【あらすじ】

普通の人間とは少し違う考えを持つ

ただの人間。

非日常とは何か知らない

ただの人間。

そして日常を愛する

ただの人間。

そう、ただの人間だったはずの人間の話。

ただそんな話

第一話 ただの人間。

人間とは実に不思議な存在だ

いや少し違うか。俺は人間自身を不思議だとは思っていない。どちらかというと、

人間の思考とは不思議だ

これが合っている。まあこんな事を中学生の頃から考えている俺の方が一般的には、不思議だろう。

中学生という時期を過ごした事があるなら、一度は考えたことぐらいはあるはずだ。

自分が何かすごい力を持っていたらとか・・・
異世界に行って勇者になったりとか・・・
そうじゃなくても他人より優れているところがあるとか・・・
まあそういう事だ。

だからといって小学生や高校生がそんな事を考えていたりしたところで俺の話が変わる事はないが、
まあ俺が言いたいのはこういう事を考える人間の思考が不思議だということだ。

だがそういう事を一度も考えない人間もいるかもしれない。
だがそんな人間の思考こそ不思議だと俺は思う。

いやまあ状況によってはそんな事を考える余裕がない人間もいるだろう。

例えば、少年兵だとか戦争中の国の人とかは考えられないかもしれないが。

まあ俺は、そんな非日常には興味がないわけではないが、俺の興味があるのは、ごく普通の日常の人間だ。

こんな事を言っただけではいるが、所詮俺はただの人間だ。

そう俺は　ただの人間。

思考がおかしな　ただの人間。

力の無い　ただの人間。

非日常とは何か知らない　ただの人間。

そして日常を愛する　ただの人間。

そう俺は、あの日までは何も知らない

ただの人間だった。

第二話

日常終焉（前書き）

第二話です。

ではさしあげ

第二話 日常終焉

俺の日常は平凡だ。

朝6時半ぐらいに起き、着替え、朝食を食べ、家を出る。

自転車で駅まで行き、電車に乗り、高校に行く。

授業を受け、友達と話し、学食を食べ、また授業を受ける。

また電車に乗り、駅に置いた自転車で家に帰る。

ああ 平凡だ。

だが何をしていても、考えている事は最終的にこの事ばかりだ。

人間とは・・・

ただこればかりを考えている。答えを見つけようとしているわけではない。

ただ考えているだけ。自分を客観的に見てもこんな事を考えている事以外は、平凡だ。

そう俺は平凡に生きている。だからこそなのだろう。今ちよつとした気紛れでこんな所にいるのは。

今、俺は光といえば月の光だけしかないような、場所を歩いている。後になって思えばあの気紛れを運命というのだろう。

といっても運命なんて、綺麗な言葉では片付かないような事になるのだが。

閑話休題

まあ月の光だけとは言ってるものの、森や山にいるわけではない。

ただの路地裏をいるだけだ。路地裏だからといって、電気の光が無いというのもおかしい話だが。

それだけ今の俺は町の深い場所にいるんだろう。だからといって恐怖を覚えることは無い。

さすがにこの年にもなって不気味には思っても恐怖は無い。まあ恐怖はなくてもこんな所にいたって意味も無い。

本当に俺はなぜこんな所に来たんだ。

だがここまで来て戻るのも味気ない。折角なのだから、もう少し先に行ってみよう。

そうしてから5分が経った頃だろう。少し開けた場所に出た。

ただそれだけ。まだ先には行けそうだが家族も心配するだろうから帰ろう。

そう思い振り返った所だった。

ぴちゃ

そう最初は水の音なのと思った。雨も降ってないのにおかしいとは思ったが、

振り返ってはいけないなぜかそう感じた。

だが俺はそれと同時に逆の思いを感じた。

振り返らなければいけない。

それを感じた瞬間、俺の体は操られたかのように振り返った。

振り返ってしまった。

振り返った俺の前には

怪物がいた。

第三話 逃走（前書き）

投稿しました。

ストーリーは思い付くんですけど、

文章にすると難しいですね。

では、どうぞ。

第三話 逃走

怪物は腕を俺に振るった。

やはり人間とはイレギュラーに弱いな。体が動かない。もう怪物の腕は目の前に迫っている。

ああ、理解した。俺は、ここで

死ぬ

「なんてできるわけないだろう。」

間一髪で体を無理やり捻り怪物の腕をかわした。だが、かわせただけじゃダメだ。

速く逃げないと、次こそ 殺される。

速く走れ俺。こんな死に方は真っ平ごめんだ。

「ちっ、でかい図体なのになんでこんな速いんだよ。」

クソ追いつかれる。路地裏の狭い道まで行ければ逃げ切れるかもしれないのに、

くっ、どうするこのままじゃ殺されるのが落ちだ。

どうする、どうする、どうする、どうする、どうする……

考えるこの状況を打破できる方法を……!

待てよ、相手はでかいんだ、細かい動きはできない筈。リスクは大きいがこれしか方法は無い。

それなら やるしかない。

チャンスは一度だけだ。相手が腕を振りかぶった瞬間、相手に突っ込む。

「！」

来た。でもまだもう少し引き付ける。あと少しだ。あとほんの少し

「！」

今、道が

視えた。

「おらあああああああ！！！」

「！！？」

よし予想通り懐に入り込まれたら、動きが鈍くなった。

この勢いで、こいつの下を通り抜けて、そのまま向こうの道に、よし 今だ！！

「うおおおおおおお！！！」

「！！？」

よし！抜けた！後は向こうの道まで行けば、たす・・・か・・・る・・・

「！！！」

なっ！？怪物が二体だと・・・
さっきまでいなかったのにいつの間に。

そんな事を言ってる場合じゃない。
前にも敵、後ろにも敵、クソどうする。

今度こそ俺は死ぬのか？

何もできないまま、何も残さないまま。

そんなのは嫌だ。絶対に嫌だ。

考える俺。ここから逃げ出す方法を

「」

なんで何も思い付かない。さっきは思い付いたんだ。
もう一度ぐらい思い付けよ、俺！！

「」

もう、怪物が目の前に来た。

なんでだろう？怪物が笑ってるように見える。

ああそうか俺を殺せるから、だから

笑っているんだ。

俺を殺せる？そうか俺はここで殺されるんだ。
よく分からない怪物に殺される。

今度こそ俺は 死ぬ

第三話 逃走（後書き）

次話は今週中には書く予定です。

話は変わりますが、感想をもらえるとうれしいです。

ダメな所の指摘とかでもいいのでお願いします。

これからも日常の観察者をよろしくお願いします。

第四話 深層心理(前)

ここはどこだろう

ただ、考え続けていた。答えなんて出ないのに。だから考えるのをやめた。

そういえば俺はここに来てどれぐらいの時間が経ったのだろう。1秒？1分？1時間？1日？1年？

俺は考えた。考え続けた。

だが答えは出ない。

答えが出ないのは、解っている

そういえば俺はここに来る前どうしていたんだろう？

俺は考えた。また、考え続けた。

だがやはり答えは出ない。

そつだ解らないなら聞けばいい。そつだそつしよう。

「 「

声が出ない。もう一度試そう。

「 「

やはり声が出ない。どういうことだ？

だがこれも考えた所で答えは出ない。なら考えるのをやめよう。

なら俺の状況を考えよう。これなら少しは答えが出るかもしれない。まず、暗い。それに寒い。

ただそれだけ。

ああ 何も解らなかった。

そついえば体が痛い。だからといって何か解るわけではないが。

体は痛いけどうにか動かせるようだ。
それなら、歩いてみよう。
出口が見つかるかもしれない。

歩き続けたが行けども行けども風景は変わらない。
だが歩き続けて解った事があるそれは、
俺以外は何も存在しないという事だ。
そうか、1つだけ答えが出た。

俺は 独りだ。

なぜだろう、笑いがこみ上げて来る。
だが、それでも、俺は

「
」

笑えない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0528x/>

日常の観察者

2011年10月1日15時01分発行